

編集者のことば

本号は、都市研究方法論グループの研究報告を特集した。

と言うと、都市研究のために輝やかな目標となるような新しい方法論を展開してくれるかと期待されるかもしれない。その期待はまことにもっともであり、そうであるからこそこのグループもこれをめざして研究に参加しているのだが、またそれだからこそ目標は簡単に得られるものではなく、実際に報告されるものは、目標をめざして努力してきた苦闘のあとの報告である。千葉正士の論稿は、わが国の学界自体がこれを求めてまだ得ないでいる状況を確認したあと、その前進のために問題点をいくつか探りだし、特に東京大学都市研究センターの方法論グループとしての問題のうけとり方を、現在の責任者として総括することを試みた。今後この方法論研究を発展させてくれる同僚たちに一つの素材を提供し、飛躍的な修正と克服を願うものである。

許萬元の論文は、前年度に武内和彦が提起した、「都市における主体と環境の問題」につき、別な視点を設定するものである。武内は、都市環境における主体を、住民である人間だけでなく、研究者である場合と人間以外の生物である場合をも含めて理解し、その全体のシステムの理解を構想したものであった。これに対して許は、主体を環境との具体的な関係に応じて弁証法的に理解すべきだと言う。この二つの理解には、あい関連する点と対照される点と双方があり、これらの点をさらに確かめ議論を深めるためにもっと論争を展開させてよい問題でもあるが、何らかの試験的な実体論をとまなわないと観念論になってしまうおそれがある。そのような条件がととのうまでしばらく待つという意味で、この問題はこれで一応打切りにしたい。ただし、この問題について挑戦者があらわれるならば歓迎したいと思っている。

他の4編は、「東京史の方法」にかかわるもので、これは、具体的に東京という対象をとり扱って一部実体論にもふれているので、総合した論点には示唆が多い。したがって、このテーマが本号特集の主題である。東京という巨大な都市、日本という国家の首都については、その歴史的研究がいくらかでもあって不思議でないのだが、個別問題についての研究はあっても、総合的な一つのシステムの社会的な社会としてこれを観察し分析しようとする研究は、一般的にはまだあらわれていない。石塚裕道の年来の研究はこれをめざすものであり、最近のその著書『東京の社会経済史』はその一段階の仕上げであると見られる。そこで、本人にはその企図を説明する、また河村望にはこれをうけとめる論文を、まず用意した。同じころに赤木須留喜著『東京都政の研究』があらわれ、東京都行政初と言ってよい体系的な史的考察が提示された。二つの著書には直接の関係はない。しかしその目標と成果には、共通のものがあるとわれわれは理解し、東京史の方法を考えようという者にはこの上ない贈り物とうけとった。部外から大森彌助教授がわれわれの願いを入れてこれを紹介批評して下さったことに感謝する次第である。もう一編石田頼房・池田孝之の建築線に関する研究報告は、東京史の方法を意図したものではなかったが、その歴史にも言及しており、このようないわばハードな研究が前記の行政史さらに社会経済史の中に理論的に組みこまれるならば、東京史の方法は得られたことになるだろうと、考えられる。そういう方向を示す一つの示唆として主題テーマに編入した次第である。

「東京史の方法」を検討する上記4論文には、各筆者というよりも、その属する専攻分野の方法論による相違・対立が目立っている。これこそ、都市研究方法論が打開すべき問題点であろう。